

# 旧幕府御家人渡部温の出版

## —英文及び和訳『伊蘇普物語』について—

Former Edo-Bakufu Gokenin, Watanabe On's Publications  
— About “AEsop's Fables” in English and Japanese Translation —

堤 美智子\*

はじめに

1. 渡部温小伝
  2. 渡部温の出版物概略
  3. 『改正増補伊蘇普物語』 英文翻刻版と和訳版
  4. 『改正増補伊蘇普物語』 英文翻刻版と和訳版刊行時の洋式造本事情
- おわりに

### はじめに

幕府徳川家は慶応3（1867）年大政奉還し、慶応4（1868）年駿府70万石への移封を命じられた。最後の徳川将軍慶喜も、その跡を継いで徳川家当主となった徳川家達も駿府に移住した。

一藩となった駿府藩は藩士の子弟教育のため、その領地である府中に明治元（1868）年11月15日府中学問所を、沼津に明治2（1869）年1月8日沼津兵学校・同附属小学校を開校した。

沼津兵学校<sup>(1)</sup>の目的は静岡藩の陸軍将校養成であった。その教育内容は幕府の遺産を継承し、西欧の学問を積極的に取り入れた進んだ教育であった。英語とフランス語が必須とされ、万国地理、西洋物理学、天文、万国史、経済学などが原書

---

\*花園大学非常勤講師

のテキストによって教授され、専用の教科書が刊行された。特に科学技術の基礎となる数学については、当時西洋流の数学を教える教育機関は稀であり、沼津兵学校は数学教育の全国中心地であった。しかし、明治4（1871）年沼津兵学校は明治政府兵部省へ移管され、明治5（1872）年5月廃校となる。その間わずか3年半ではあったが、教授や生徒は明治維新政府の要請を受けて中央に出仕し、各分野で日本の近代化に貢献した。

本稿では沼津兵学校の一等教授として英語教育に当たり、自らテキストの出版を行った渡部温の出版活動、中でも遠く文禄年間（1592-95年）にキリスト教宣教師によって日本にもたらされた「イソップ物語」の日本初の英語翻訳版と、その自らの和訳版の刊行、造本について論ずる。

## 1. 渡部温<sup>(2)</sup>小伝

渡部温（以下温とする）は天保8（1837）年6月幕府御家人渡部重三郎の一子として江戸に生まれた。名は温。幼名銈太郎。通称は一郎。号は無尽蔵主人、知新、梧堂。

父重三郎は弘化4（1847）年には長崎奉行の下役として長崎住まいであった。当時の家禄から推定して手附か同心を務めていたようである。温は10歳のころである。嘉永7（1854）年父は下田奉行支配手附出役となり、温も下田に移り住む。前年ペリーが浦賀に来航し、この年、日米和親条約附録協定書を結び、下田を開港した直後のことであった。この年には津波と大地震が下田を襲いロシアの使節プチャーチンが乗船して来航したディアナ号が大破し、富士川の河口で沈没した。温は18歳である。

安政3（1856）年渡部一郎は20歳で下田奉行書物助に採用された。父重三郎は安政5（1858）年神奈川表開港に伴い神奈川表支配調役並に役替、一家は安政6（1859）年に神奈川奉行所に移住した。温は神奈川奉行所書物御用見習の役につき、横浜英学所で英語を習得することとなった。温は17歳から22歳の多感な時期を開国の渦中にあった下田で過ごした。

鎖国時代、西欧諸国からの唯一の情報の窓口であったのはオランダであった。

そのため外国との交渉にオランダ語は欠かせないものであった。しかし、ペリー来航後、オランダ語だけでは用が足らなくなり、英語を学ぶ必要が生じてきた。安政5（1858）年日英修好通商条約が締結され、5年後には外交交渉には英文を用いることが規定されて幕府も藩書調所で英語学習を奨励せざるをえないこととなる。御家人の倅、厄介の内から若者を選んで英米人の宿所で英語を学ばせている。年齢、経歴、身分などから、その中に温も入っていた可能性は充分にある。<sup>(2・4)</sup>

万延元（1860）年父重三郎は御台所番へ役替となって家族とともに江戸に戻った。

文久2（1862）年温は洋書調所英学句読教授出役に、その年の12月に洋書調所英学教授手伝並出役に進む。温は25歳である。

このころ温は會譯社の同人となった。會譯社では柳川春三が中心となり、洋学者が集まって「横浜新聞」を発行した。この新聞は日本において外国人が発行した新聞の記事のうち日本に関するものを抄訳、筆写して同人間に回覧したり、幕府公用の参考にしたものである。温は社会の動きに敏感であり、世のため、自己のため、着実に自己の持てる能力を発揮した。そのような生き方はジャーナリストとして、また実務官僚として執筆活動を始めたところにあるのではないだろうか。

元治元（1864）年開成所教授手伝出役に、慶応2（1866）年には開成所教授職並手伝出役に昇進している。この時期から開成所の許可のもと、教科書出版活動を開始。慶応3（1867）年には英国マクドゥガル陸軍中佐の著作の温による翻訳本『陸軍士官必携』の第一冊を出版、幕府当局へ献納している。

慶応3（1867）年8月開成所調役に任ぜられ、翌月9月には開成所教授職並に昇進し、出役ではなく、開成所の専任教官となった。温30歳である。

明治元（1868）年徳川家達に従って駿府に移り、儒学教授所であった明新館附属に任ぜられた。しかし、同年沼津兵学校が開設されると一等教授並、英学担当の筆頭に任命される。

温は沼津兵学校時代に多くの英文原書、その翻訳書を刊行している。それらの書物は兵学校（以下沼津兵学校は兵学校と略す）の教科書として使用されたものである。

兵学校の教科書として出版されたものは「沼津版」と称されているが、徳川家が出版した「官版」と温が刊行した版とに二分される。温出版の沼津版については、後に述べることとする。

明治2（1869）年秋以後、明治政府から兵学校へ教授出仕の要請が相次いだ、兵学校頭取の西周に始まり、温も明治4（1841）年陸軍兵学校小教授として東京に移った。さらに明治5（1842）年には紙幣寮七等出仕に転任した。この時期、教育界から離れているが、出版活動の方を開始している。当論文で主として論ずる『伊蘇普物語』改訂版の元となった初版『英文伊蘇普物語 乾・坤』、『通俗伊蘇普物語 全6冊』である。

明治7（1874）年温は文部省七等出仕に転任、第5大学区広運学校長兼長崎師範学校長に任命される。広運学校の前身は幕府によって安政5（1858）年に設立された英語伝習所である。長崎師範学校はこのとき設立された。翌明治8（1875）年、広運学校改め長崎英語学校長兼長崎師範学校を免ぜられて東京外国語学校長に転任。しかし、明治10（1877）年同校を依願免職願い出によって野に下った。開成所の専任教官となってから10年、温は40歳である。

以後の温は一転漢学に取り組み、明治18（1885）年、もう一つの出版業績である『康熙字典』の改訂出版に漕ぎつけた。その間、明治15（1882）年東京府議会選挙に出馬、当選。以後7回の選挙に連続出馬当選して東京府政のために働いた。府政の間では明治初年、禄を失った困窮士族に明治政府が無利子で貸し付けた「士族授産金」を巡る訴訟解決のために働き、勝訴解決に漕ぎつけている。

明治22（1889）年東京区会議員選挙が開始される。温は牛込区の選挙に出馬当選、初代区会議長となる。東京市議会にも明治22（1889）年第1回選挙から深く関与し、東京市名誉職市参事会員となった。しかし明治26（1893）年水道管制作のため設立された日本鑄鉄合資会社の請負契約締結事務不履行の責任問題から東京市名誉参事会員12名とともに総辞職した。以後温は市会活動から退いた。

一方温は明治18（1885）年ころから実業界に関与する。明治18（1885）年東京瓦斯会社の創立委員に名を連ね監査役を務める。明治20（1887）年には兵学校時代の同僚等と東京製綱会社を創立、社長となる。明治22（1889）年、これも旧幕

臣である渋沢栄一等とともに横浜船梁会社の創立委員となり、後監査役となった。さらに西洋式製本には欠かせない板紙製造会社の社長も明治 23 (1890) 年当時社運が傾いた会社を引き受けている。<sup>(3)</sup>

明治 31 (1898) 年 7 月 31 日に病気のため、東京製綱会社を辞任し、翌月 8 月 7 日温は満 61 歳で死去した。

晩年の温については東京製綱会社への就職志望の若者の世話を焼いたり、孫と人力車に同乗して出かけたり、実業界や地方行政で活躍しながらも成功者として落ち着いたものであったようだ。沼津兵学校の教え子であった田口卯吉は主宰する『東京経済雑誌』第 941 号 (明治 31 年 8 月 20 日) に追悼記事を掲載し、その経歴を記し、政府の賞勲局は特に銀牌を下賜し、公共事業に尽くした業績を賞されたと結んでいる。

## 2. 渡部温の出版物概略<sup>(5)</sup>

幕末、開成所時代から温は翻刻本や翻訳本の出版に手を染めていた。開成所には嘉永 3 (1850) 年、出島のオランダ商館長が江戸参府の折に、十二代将軍、徳川家慶に献上したアムステルダム製のスタンホープ印刷機と活字や附属品が下げ渡されていた。温も開成所においてこの印刷機を用いて翻刻本を印刷したと考えられる。また、徳川家が静岡に移ってからは沼津兵学校の教科書もこのスタンホープ印刷機を用いて印刷されたとされる。以下に簡略に列挙する。

1. コーネル著『地学初歩』翻刻 全 2 冊、慶応 2 年、江戸刊。
2. マクドウガル著『陸軍士官必携』翻訳、全 10 冊、慶応 3 年、江戸刊。
3. ファン・デル・ベール著『英吉利会話篇』翻刻、全 1 冊、慶応 3 年、江戸刊。
4. 『英佛単語篇注解』翻訳、全 1 冊、慶応 3 年、江戸刊。
5. 『西洋蒙求』翻刻、全 1 冊、慶応 3 年、江戸刊。
6. 『英蘭会話訳語』ガラタマ先生口述、全 1 冊、明治元年、江戸刊。
7. 『モルレイ氏英吉利小文典』翻刻、上下 2 冊、明治元年 (推定) 刊。
8. 『経済説略』翻刻、全 1 冊、明治 2 年、沼津刊。
9. 『英国史略』翻刻、乾坤 2 冊、明治 4 年、沼津刊。

10. 『英文伊蘇普物語』 翻刻、乾坤 2 冊、明治 5 年、沼津刊。
11. 『仏学初級』 全 2 冊、明治 5 年、東京（推定）刊。詳細不明。
12. 『通俗伊蘇普物語』 翻訳、全 6 冊、明治 5 年～7 年、東京刊。
13. 『勸善諭道伝』 訓点、全 1 冊、明治 10 年、東京刊。
14. 『曲亭馬琴戯作序文集』 全 1 冊、明治 11 年、東京（推定）刊。
15. 『北京官話伊蘇普諭言』 全 1 冊、明治 12 年、東京刊。
16. 『標註訂正康熙字典』 全 17 冊、明治 20 年、東京刊。
17. 『康熙字典考異正誤』 上下 2 冊、明治 20 年、東京刊。
18. 『改正増補通俗伊蘇普物語原書』 全 1 冊、明治 21 年、東京刊。
19. 『改正増補通俗伊蘇普物語』 全 1 冊、明治 21 年、東京刊。
20. 『校正康熙字典』 上下 2 冊、中華民國 54（1973）年、板橋（臺北縣）刊。

### 3. 『改正増補伊蘇普物語』 英文翻刻版と和訳版

温の出版活動で最も著名なものは『伊蘇普物語』の英文訳翻刻と温自身による和訳、並びに『康熙字典』の改訂版出版である。

イソップ物語の日本での受容は織豊期文禄年間にキリスト教の宣教師によって活版印刷術とともに始まった。キリシタン版として知られる『Esopo no Fablas』はローマ字で当時の日本語口語訳を表記している。これが最古とされる。その後、新村出が上記キリシタン版大英博物館所蔵本を写書し、日本語に翻字した『文禄旧訳伊曾保物語』がある。文禄以後も慶長、元和、寛永、万治年間に種々の版が刊行されている。キリシタン禁制時代にもかかわらず、処世術を説く訓話が当時の社会に歓迎されたのであろうか。<sup>(6)</sup>

その後、温による日本初の英語訳本の翻刻出版、及び英語からの初和訳本刊行となる。

本稿では『伊蘇普物語』の改訂版であり、西洋式の製本様式で造本された明治 21 年版を中心に論ずる。

明治 5（1872）年沼津で翻刻出版された『英文伊蘇普物語』乾坤 2 冊は日本で初めて出版された英文訳書として著名である。沼津刊なので、沼津兵学校で英語を

学ぶ教科書として使用されたものと考えられる。この版を温が和訳した『通俗伊蘇普物語』全6冊は一般販売され、1万部が売れたとされる。このときの利益金で明治5年頃東京市牛込通寺町の松源寺の北隣、中山備前守屋敷跡地白銀町に約3千坪を購入して家を建てた。敷地内には石倉もあり、「渡部は伊蘇普で蔵を建てた」<sup>(7)</sup>との世評であった。原書翻刻には無かった挿絵を河鍋暁斎、藤沢梅南が描いている。<sup>(8)</sup>

その頃、明治21(1888)年温は東京製綱会社の創立に乗り出していた。この頃『改正増補通俗伊蘇普物語原書』と『改正増補通俗伊蘇普物語』を出版している。『英文伊蘇普物語』乾坤2冊及び『通俗伊蘇普物語』全6冊が和綴じ本であったのに対して、これらの製本は洋本仕立てである。筆者は筑波大学中央図書館所蔵本を閲覧して両者を比べて見ることを得た。次に各々の書誌の特徴を記述する。

### 3. 1 『改正増補通俗伊蘇普物語原書』について

前表紙記述：(横書き) AESOP'S FABLES. — (一で改行を表す) BY THOMAS JAMES, M.A.—EDITED WITH EXTENSIVE ADDITIONS,—BY T. WATANABE.—改正増補—通俗伊蘇普物語原書—英国技藝士—トマス・ゼームス氏原譯—渡部温補纂—東京

標題紙記述：AESOP'S FABLES:—A New Version,—CHIEFLY FROM ORIGINAL SOURCES.—BY THOMAS JAMES, M.A.—HON. CANON OF PETERBOROUGH,—EDITED WITH EXTENSIVE ADDITIONS—BY T. WATANABE.—WITH 118 ILLUSTRATIONS.—TOKYO:—21<sup>st</sup> YEAR OF MEIJI.

INTRODUCTION の日付け：January, 1848.

奥付：明治廿一年十一月九日印刷—同十二月十日補纂出版 定價金五拾錢—補纂發行人 渡部温—牛込區白銀町廿九番地—印刷人 仁科衛—京橋區築地貳丁目拾七番地—賣捌所 博聞社—京橋區銀座四丁目—同 丸善書店—日本橋區通三丁目—同 中央堂—日本橋區通藍町—同 梅原龜七—大坂東區備後町四丁目



装丁：ハードカバー赤クロス表紙丸背<sup>(9)</sup>(図1)。

この版は「改正増補」との角書がある。

明治5年刊の原書が「改正増補」されたので、翻刻もそれに従って出版されたのであろうか。標題紙には A New Version との記述があり、原書が改訂されたのだとも考えられる。温は翻刻版には出版地、出版年を翻刻版出版の TOKYO、21<sup>st</sup> YEAR OF MEIJI としているためにオリジナルの出版地、出版者は不明である。しかし INTRODUCTION の末尾日付に January, 1848 とあるので原書の出版は 1848 年かそれ以後と考えられる。振り返って沼津刊明治5年版の原書出版年の手掛かりを探してみる。『英文伊蘇普物語』の標題紙には、やはり温によって出版地は JAPAN—NUMADZ、出

版年は 1872 と翻刻版の出版年である明治5年が記されている。一方、この版の INTRODUCTION の日付は当「改正増補」版と同様 January, 1848 と印刷されている。明治5年刊の翻刻版も明治21年刊の翻刻版も実は同一オリジナル版 1848 年1月刊に基づいていると考えるべきなのだろうか。もっとも両版の標題紙にはどちらにも A New Version との表示がある。明治5年刊の翻刻版の書名には「改正増補」との角書が無いことを考えれば、明治21年刊翻刻版の「改正増補」は温の行った行為であると受け取れる。

両翻刻版の違いの一つに挿画の有無がある。明治5年版には挿画は無い。沼津兵学校で教科書として用いられたものに相応しく、和装本で落ち着いた浅黄色の型押紙表紙のものである。一方、明治21年版には挿画が豊富に入っている。

温によるイソップ物語の翻刻、和訳は Thomas James の 1848 年版を原書としていると考えられる。この本の国内所蔵を国立情報学研究所の NACSIS Webcat で検索すると 1848 年本はヒットしない。しかし、出版年推定 1000 年代の [1---] と

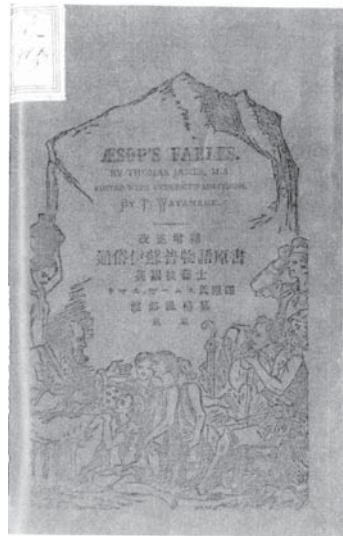


図1 筑波大学中央図書館所蔵本オリジナル前表紙紙コピー。再製本の際綴じ入れられている。



記述するニューヨークで Grosset & Dunlap 社から出版されたものがヒットする。6 大学図書館で所蔵している。国立国会図書館蔵書検索ではやはり Grosset & Dunlap 社版のみ所蔵している。が、こちらは推定出版年「1848？」としている。この表記法は標題紙など主要な目録データ採取部分に出版年の記述が無い場合、その他の箇所から出版年を推定する場合の表記法である。筆者が筑波大学中央図書館で閲覧したように INTRODUCTION の日付を推定出版年として記述したと見ても良いだろう。そこで、国立国会図書館の複写サービスで標題紙コピーを取り寄せて見るとやはり、標題紙に出版年の記述はない。しかし、前表紙に使われているキツネの絵や標題紙前頁の図版の図柄を見ると温出版の当図書とは図柄も雰囲気も異なる作者によるものである。Grosset & Dunlap 社出版の本の標題紙には“WITH MORE THAN ONE HUNDRED ILLUSTRATIONS—DESIGNED BY—JOHN TENNIEL”とある。温の明治 21 年版の原書はやはり Grosset & Dunlap 社版ではないのであろうか。

もう一度振り返って明治 5 年刊の『英文伊蘇普物語』の標題紙を見ると、本文には挿画が無いにもかかわらず、“WITH MORE THAN ONE HUNDRED ILLUSTRATIONS—DESIGNED BY JOHN TENNIEL”との記述がある。原書の標題紙記述をそのまま引き写してしまったのだらう。英文書出版の極初期、このような誤記が標題紙にあることは無理も無いだろうし、明治初期の英語教育や出版事業の開拓者である渡部温にして。とその苦労が微笑ましく感じられる。

では当翻刻版に使用されている挿画の原画典拠は何であらうか。Thomas James 英訳の Aesop's Fables の 1848 年版を Goole Book Search で検索してみる。上記、Grosset & Dunlap 社出版の他にロンドンの John Murray 社刊のものがヒットする。Google の全文閲覧サービスで標題紙や本文、挿画を見ると、こちらは標題紙に出版年が 1848 と表記されている。

さらに標題紙前頁の図版も国会図書館所蔵本の Grosset & Dunlap 社の標題紙前頁と同一である（図 2、図 3）。

しかし、両書標題紙表記データの相違点がある。ロンドンの John Murray 社版の標題紙には "A NEW VERSION" の記述があるが、Grosset & Dunlap 社版の標題紙には "A NEW VERSION" の記述は無い。一方、先に触れたように当温の明治 21 年版には "A NEW VERSION" の表記がある。明治 5 年刊の原書と明治 21 年刊の原書は、国内所蔵がある国立国会図書館所蔵の Grosset & Dunlap 社版ではないのであろうか。John Murray 社版、Grosset & Dunlap 社版の各々の本文に挿入されている挿画は同一図である。

一方、温出版の明治 21 年版の挿画は John Murray 社、Grosset & Dunlap 社両者の挿画に図柄は似せているものの異なる作者によるものようである（図 4、図 5）。

以上標題紙の記述等、書誌の事項から温の英文翻刻『改正増補伊蘇普物語原書』の原書、特に Thomas James の訳本について検討してみた。書誌的比較のみからでは原書の確定は困難であるが、温自ら表紙等に印刷しているように Thomas James の訳本がその主たる底本であることは確認できる。原書の同定については収録寓話等による比較検討からの詳細な研究が片桐芳雄氏によって発表されている。<sup>(11)</sup>



図 2 Murray 社版標題紙前頁図版<sup>(10)</sup>



図 3 国立国会図書館所蔵 Grosset & Dunlap 社版標題紙前頁図版

### 3. 2 和訳本『改正増補通俗伊蘇普物語』 について

前表紙記述（縦書き）：英国技藝士—トマス・  
ゼームス氏原譯—改正増補通俗伊蘇普物語—  
日本 渡部温和訳

序：[梅沢（筆者追記）] 梅南による。明  
治6年2月1日付。

伊蘇普小傳：渡部温による。明治5  
年5月付。

改正増補例言：渡部温による。明治  
21年初秋。

奥付：明治八年十一月十二日版權免許一同  
廿一年十一月廿九日印刷 定價金七  
拾錢一同 十二月三日増訂出版一  
譯兼發行人 渡部温—牛込區白銀町  
廿九番地—印刷人 仁科衛—京橋區  
築地貳丁目拾七番地—賣捌所 博聞  
社—京橋區銀座四丁目一同 丸善書  
店—日本橋區通三丁目一同 中央堂  
—日本橋區通藍町一同 梅原龜七—  
大坂東區備後町四丁目

装丁：ハードカバー赤クロス表紙丸背（前  
表紙の図柄は上記（図1）原書とまっ  
たく同一である）

挿画：『改正増補通俗伊蘇普物語原書』とまっ  
たく同一である。第1話の挿絵には“K.  
M. Tatebe”のサイン（図5）、他の挿  
絵には“K. T.”のサインが見受けられ



図4 John Murray 社刊第1話キツ  
ネとブドウ挿絵 註10と同  
様 Google Book Search から  
転載



図5 明治21年刊『改正増補通俗  
伊蘇普物語原書』第1話キツ  
ネとブドウ挿絵。筑波大学中  
央図書館所蔵

る。

同時期出版の原書翻刻本と和訳本から読み取れる書誌事項の比較を試み、温が両書を刊行した意図を探ってみたい。

奥付から『原書』（以下、『改正増補通俗伊蘇普物語原書』を『原書』と略す）〔版權所有〕の表示があり、その日付が明治21（1888）年のみである。他方『和訳本』（以下、『改正増補通俗伊蘇普物語』を『和訳本』と略す）は明治八年版權免許との表示であり、印刷と増訂出版の日付が明治21（1888）年となっている。明治5（1872）年刊の原書翻刻本は沼津兵学校の教科書として出版されたもので、販売されるものではなかったので、明治21年になって『原書』出版の版權を取得したものであろう。『英文伊蘇普物語』乾坤2冊揃いでの国内大学図書館所蔵は少ない。愛知教育大学所蔵本で坤巻を確かめたところ、奥付がなく、当然、版權表示も印刷所も売捌所の表示も無いところから、やはり、沼津兵学校の教科書用として沼津で印刷されたことは間違いないようである。改正増補版の「定價」も『原書』は50銭、『和訳本』は70銭で『和訳本』の方が高い。『和訳本』は350頁に対して『原書』は197頁との差からでもあろうか。『和訳本』は、小学生への修身訓話に適當である。などの宣伝文句が奥付の次頁に綴じ込まれた「売捌書籍目録」に見られる。

『原書』、『和訳本』ともに巻末に同じ「売捌書籍目録」が掲載されている。『原書』のほうの宣伝文句には“彼此（『原書』と『和訳本』）対照せば英文解説の便を得べし”<sup>(12)</sup>とある。この稿中、筆者は原書とその翻訳書との関係から、原書を先に記述して来たがわずか7日間の差ではあるが、出版の順序は12月3日が『和訳本』、12月10日が『原書』である。明治初年当時ベストセラーとなった『通俗伊蘇普物語』全6冊を約15年後に改訂増補して装いも新たに「西洋本」（「売捌書籍目録」の表示）として世に問うたというだけでなく、英語を学ぶ者が便利のように温の翻訳文と対象できる形で、あたかも双子のように同様の装丁でほぼ同時期に『原書』を追って出版した温の『原書』出版の意図はここにあるのではないと思われる。現代では、一般に販売数が少ない学術書は一般書に比べて価格が高くなるのは常識だが、温は『原書』の方の価格を『和訳本』に比べて低くしている。地方自治体の議会や実業界に身を置くようになって、温は自身の原点を西洋文化や学問

の学徒、教師に置いていたのではないだろうか。「国立国会図書館第 140 回常設展示 明治の息吹 ―漫画・諷刺画から―」の図録サイトによれば“白米 10kg の標準小売価格（東京）は、明治 15 年 82 銭、明治 20 年 46 銭、明治 25 年 67 銭。『値段史年表』【DF58-E5】より。”というものである。現代の米の値段から類推すると、50 銭という価格はちょうど米 10kg 分 4 千円程度であろうか。当時としても手軽に学生が購入できる価格ではないだろう。が、英訳、和訳を対照できるとあれば英語を独学で学ぼうとする学生には便利なものであったであろう。

#### 4. 『改正増補伊蘇普物語』 英文翻刻版と和訳版刊行時の洋式造本事情

明治維新後、我が国の洋式製本術の始まりは明治 6（1873）年カナダ人 W. F. Paterson が印書局に製本技術師として雇われ、製本教師として、製本・罫引術を多くの技術者に教えたことであった。当時明治 6（1873）年ころは、日就社から出版された『英和字彙』1500 余頁の本は表紙芯の板紙が無く張子紙を何枚も貼り合わせ、革装丁で背文字等の金箔押はわが国ではできなかったので上海まで送り、押してもらった。という状況であった。印書局等政府機関の出版物は御雇外国人の意向で用紙、板紙、革、クロスなどはすべて輸入品で賄われていた。明治 10（1877）年中村正直は自身の翻訳書の改訂版『英国・スマイル著西国立志伝』を活版印刷、国産材料による洋式製本を条件に秀英社に発注した。秀英社は前年明治 9（1876）年戊辰戦争の生き残り、旧幕臣の佐久間貞一が東京京橋におこした活版印刷所である。佐久間は製本材料である板紙を国産で賄おうと自ら『英国版百科全書』を参考にし、苦心の末、麦わらを材料として板紙を作り出した。明治 10（1877）年第一回内国勸業博覧会にこの板紙を出品して受賞している。これが、わが国の板紙製造の始まりであるとされる。その後、日本でも菓子箱、煙草、その他の箱類に板紙の需要が出てきたところから、明治 19（1886）年東京板紙会社設立の運びとなり、佐久間貞一は社長に就任した。しかし、国産の板紙は輸入品と比べ品質が劣り、国内需要も予想されたほど伸びず、会社は経営不振となった。佐久間は社長を辞任。会社創設時の株主の一人浅野惣一郎が社長となるも不振は解消されず、その跡を引き継いだのが渡部温であった。

この頃から板紙の需要も暫時増加、明治 27 (1894) 年当時神戸製紙所の技師長小野寺正敬を技師長として迎えた頃から技術的にも急速に進歩、生産量、販売量とも増加した。明治 29 (1896) 年創業以来初めて 2 割の配当を行うことができた。

洋式製本の技術はどのようにして日本国中に広まり、今日のように定着していったのであろうか。「京都の製本業の歴史」をテーマに日本図書館研究会図書館史研究グループ京都地区分会の主催で 1975 年に行われた京都の滝本製本所 3 代目滝本勝二氏へのインタビュー記録<sup>(16)</sup>によれば滝本氏の安政元 (1854) 年生まれの祖父が東京から兵庫を経て大阪の草紙屋に奉公、和本仕立てを習得し、京都の烏丸今出川で和本仕立ての専門店を開店。同所に開校していた同志社の外国人宣教師や教師に依頼されて製本をしていたのだが、洋製本の知識が無いところから初めは和本仕立てで製本し納めていたとのことである。同志社大学の前身、官許同志社英学校は明治 8 (1875) 年創立、翌明治 9 (1876) 年今出川へ移転している。明治初年時の製本事情はこのようなものであった。その後、同志社の教師カーブ、ラーネットはどうしても自分の気に入った洋式製本をして欲しいと、自ら製本の材料資材をアメリカから取り寄せ、いろいろと滝本氏に教えたということである。しかし、その技術習得は困難なうえ、その時期洋製本の需要は他になく、収入にならない仕事を昼は本を壊して研究し、夜は夜泣き蕎麦の屋台を引っ張って耐えた。それから 3、4 年経った頃、洋製本も要望に耐えうるものができるようになった。明治 27 (1894) 年～28 (1895) 年のことであったそうである。

製本材料の表紙クロスも京都では入手困難であり、背文字などの金箔押しも金屏風に使う金箔を使って、印刷用の活字を一文字ずつ手で押した。その内明治 30 (1897) 年京都帝国大学ができると東京から職人が招かれて来たとのことである。滝本氏によれば東京などとの職人間の連絡や交流は無かったとのことであるが、上記板紙製造事情などに見られるように東京でも京都と同じようなものであったらしい。

上記『英国・スマイル著西国立志伝』の改訂版『西国立志編』<sup>(17)</sup>を洋製本での出版にこだわった中村正直は天保 3 (1832) 年温と同様幕府御家人の子として江戸に生まれた。明治維新後は徳川家達に仕え、徳川氏が沼津兵学校に先駆けて静岡に



開校した静岡学問所の教授となった。幕末にはイギリス留学も果たしている。生まれも育ちも温とは5歳年上の良く似た境遇である。イギリス留学のおり、感銘を受けた Samuel Smiles の著書『自助論』を静岡学問所教授の職にありながら、翻訳、明治4（1857）年静岡の地で出版した。装丁は木版和綴じ本であった。この時の改訂版が洋製本でと特に要望した『西国立志編』明治10年刊行本である。初版本が12冊の和装本であるのと対照的に1冊に合本された『西国立志編』洋装本は当時、多くの学校で教科書に採用されたこともあって発行部数は百万部を越えたという。

この時期明治8（1875）年、温は長崎英語学校長に任命されたが、短期間で免ぜられ、東京外国語学校長に転任、しかしこの任もすぐに明治10（1877）年辞任し、野に下った。その後英語から漢学研究に転じて8年の後『康熙字典』の改訂出版を果たしている。各学校長を命じられては、短期間で辞めているのは温の幕臣としての身分の低さが関係しているとの戸塚氏の説もあるように温は何か期するところがあって野に下ったのではないだろうか。

同時期中村正直による『西国立志編』の洋製本での出版、売れ行き、若者への影響力を知らなかったはずはない。他方温が8年の改訂作業を経て出版した『康熙字典』は和綴じの装丁であったが、社会の要望に応えることを得て、現在まで温の改訂版が用いられている。

野に下り、地方自治方面や実業界に転じて出版物からの利益も得た温は悠々とその後の人生を豊かに送ったと言われている。しかし実業界や政界で功成り名遂げた温であったが、まともや出版活動に手を染めた。明治21（1888）年『改正増補通俗伊蘇普物語』と『改正増補通俗伊蘇普物語原書』を洋製本の装丁でほとんど同時に出版、和訳版は小学校の修身の教科書として使って欲しい、また原書版は英語勉学の用に立てて欲しいとの意図を示している。そのさなか、経営が難しくなった東京板紙の社長も引き受けているのである。温が出版した洋製本に使用した板紙が国産の東京板紙のものであるかどうかは不明であるが、出版の年代と社長就任の時期を考え併せると図書の製本という方面にも絶えず関心を抱いていたのではないだろうか。やはり温のこの時代における社会的存在の意義は英語学



の研究学徒、更に沼津兵学校での教授職にあり、開成所時代から、その時代、時代の要請に精一杯、誠実に応え成功した旧勢力の一員であったと考えたい。

## おわりに

渡部温という名前を知ったのはそれ程以前のことでない。花園大学文学部研究紀要に「新村出の本つくり」<sup>(18)</sup>について、また「富士文庫」<sup>(19)</sup>について投稿するうち、関連文献中に沼津雑記とか沼津版という語をたびたび目にし、沼津に何があるのだろうと思うようになった。樋口雄彦氏の「沼津兵学校」についての業績に会い、その導きで沼津明治史料館の存在も知り得、沼津関係の中でも日本初の英語訳イソップ物語を翻刻、翻訳出版して成功者と言われる渡部温に出会った。私ごとではあるが、筆者は静岡県富士市の出身である。しかも京都大学図書館職員として33年間勤めた。旧幕臣の子孫新村出の父関口隆吉は初代静岡県知事であり、新村は京都帝国大学図書館長を長らく務め、花園大学創立当時の教授陣の一人でもあった。また、新村出は本稿で触れたようにイソップ物語には深い造詣をもつ言語学者である。図書館職員としてイソップ物語という日本へ外国の知恵をもたらした書物とその出版には大いに興味を抱いたものである。しかも出身地に近い沼津や下田という温縁の地も筆者自らに近しい土地である。温の刊行した本はどれも先進的に外国の学問、経済学、英語、地学などを日本に紹介するものである。なかでも明治初期刊の『英文伊蘇普物語』『通俗伊蘇普物語』は片桐芳雄氏の詳細な英語教育導入史面からの研究が先行研究としてある。筆者はあまり触れられていない洋製本の『改正増補通俗伊蘇普物語』と『改正増補通俗伊蘇普物語原書』を製本という観点から調査し論じようと試みた。すると西洋式の製本技術や資材材料は輸入に頼っていたのではなく、なんとか国産で賄おうという明治人の気骨が見えて来たのである。もっとも板紙については未だに国産のものは柔らかく、西洋の中世から伝わる工芸製本で使用する表紙芯には適さない。製本様式にも非常なまでに堅固にしなければ気が済まない西洋人と和綴じのように融通無碍で綴じ糸が切れれば元の針穴を使って簡単に綴じ直せるような製本で良しとする日本人の気質の違いがあるように感ずるところである。筆者は趣味として西洋式の工芸製

本を学んでいるが、明治期の洋製本事情を調べてみて、慶長年間に天正遣欧少年使節団が活版印刷を日本に最初に伝えた時の製本はどのようなものであったかと、改めて思いを馳せる。今後少しずつでも日本への西洋製本技術の伝来について調査研究して行きたいと思う。

本年は花園大学司書課程担当教員の先輩、客員教授廣庭基介先生が80歳を迎えられる。廣庭先生には図書館学、図書や図書館史について直接、間接にいつもお教えを戴いている。この拙い文章を感謝のしるしとし、記念にさせていただきたい。

この稿を執筆するのにあたって沼津明治史料館、筑波大学中央図書館、愛知教育大学附属図書館の館員の皆様に貴重な資料の閲覧や複写、撮影につき、大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

## 註

- (1) 沼津兵学校を紹介する博物館に沼津市明治史料館がある。また、主要文献には元沼津市明治史料館学芸員樋口雄彦氏の著書『沼津兵学校の研究』吉川弘文館 2005年がある。
- (2) 渡部温の詳細な伝記的文献には次の片桐芳雄氏および戸塚武比古氏の著作がある。
  1. 片桐芳雄 幕末明治の洋学者・渡部温（一郎）覚書（1）『愛知教育大学研究報告』32（教育科学編）p. 61-79, 1983.
  2. 片桐芳雄 幕末明治の洋学者・渡部温（一郎）覚書（2）『愛知教育大学研究報告』33（教育科学編）p. 41-54, 1984.
  3. 片桐芳雄 幕末明治の洋学者・渡部温（一郎）覚書（3）『愛知教育大学研究報告』34（教育科学編）p. 33-47, 1985.
  4. 戸塚武比古 渡部温略伝―初期一英学者の歩んだ道『英学史研究』vol. 1984, No.16, pp. 33-50. 1983.著者は温の孫に当たる。『洋学史事典』日蘭学会編の「渡部温」の項も執筆している。
- (3) 近藤信儀 日本最古の板紙工場『紙バ技協誌』vol. 28, No. 10, p. 458-467. 1974.
- (4) 註2-3に詳しい。
- (5) 註2-2、註2-3片桐論文。樋口雄彦「沼津版」覚え書き『静岡県博物館協会学芸職員研究紀要』9号、p.49-64, 1986。『本のぬまづ人物誌』沼津明治史料館 1998

年による。

- (6) 松崎實 通俗伊蘇普物語解題 『明治文化全集』第15巻翻訳文藝篇、日本評論社、1992-1993(日本評論社、1927-1930の復刻版)による。昭和2(1927)年から5(1930)年当時は明治文化を見直す風潮があったようである。特にイソップ物語関係では温の『通俗伊蘇普物語』が当『明治文化全集』第15巻翻訳文藝篇に収録されているし、新村出は昭和3(1928)年7月7日、京都大学楽友会館において「伊曾保物語展観」を開催し、その目録を編纂刊行している(『新村出全集第7巻』筑摩書房に所収)。
- (7) 註2-4による。また、石上東蘂 明治初期の沼津版について 『本道楽』Vol.8, No.3, p. 27-33, 1930にも同様の記述がある。『本道楽』は沼津兵学校にも縁の深い静岡で出版されていた雑誌であり、筆者の石上も静岡人で、この一文を執筆当時は京都帝国大学図書館の司書でもあった。
- (8) 註2-2片桐論文に詳しい。
- (9) 筑波大学中央図書館所蔵本は元表紙破損のためか再製本されていて、オリジナルの表紙のカラーコピーが綴じ込まれていた。しかし、版型や表裏表紙の色、図柄が後に述べる和訳本と同一であるところから表紙も和訳本と同一仕様と推定できる。
- (10) Murray 社本は Google Book Search より引用。  
url: [http://books.google.co.jp/books/download/Aesop\\_s\\_Fables](http://books.google.co.jp/books/download/Aesop_s_Fables). 2012年10月14日アクセス。コピー可能容量を超えるため、部分的にコピーした。
- (11) 註2-2
- (12) カタカナ表記はかなに旧漢字は当用漢字で記述した。
- (13) URL:<http://rnavi.ndl.go.jp/kaleido/entry/jousetsu140.php#03> 2012年10月15日アクセス
- (14) 庄司浅水 明治・大正・昭和の装丁 『定本庄司浅水著作集 書誌篇』第7巻
- (15) 註3
- (16) 廣庭基介花園大学客員教授から下記の貴重なインタビュー記録資料をご教示いただいた。「京都の製本業の歴史」1975年(昭和50年)6月19日日本図書館研究会(図書館部会のイベント)図書館史研究グループ京都地区分会主催 於:京園(吉田山麓) 滝本製本所3代目主人・滝本勝二さんを講師に、司会:廣庭基介(京大文学部図書室) 参加者:古原雅夫氏、篠原俊夫氏、山田忠彦氏。
- (17) 参照文献:山下太郎『明治の文明開化のさきがけ』北樹出版1995年では『西国立

志編』としている。

- (18) 堤美智子 新村出の本つくり—私論—『花園大学文学部研究紀要』第36号 p. 145-160, 2004年3月
- (19) 堤美智子 富士文庫のあゆみ：私設図書館から富士市立富士文庫へ 『花園大学文学部研究紀要』第41号 p. 17-34, 2009年

#### 参考文献（註に掲載以外のもの）

- 1 樋口雄彦 『旧幕臣の明治維新』吉川弘文館 2005年
- 2 大野虎雄 『沼津兵学校与其人材 附属小学校並沼津病院』大野寛孝 1983年
- 3 笠井助治 『近世藩校に於ける出版書の研究』吉川弘文館 1972年
- 4 松浦広 『図説印刷文化の原点』印刷朝陽会 2012年
- 5 静岡県印刷文化史編集委員会 『静岡県印刷文化史』静岡県印刷工業組合 1967年
- 6 松川七郎 アダム・スミスの我が国への導入の一齣—渡部温編『経済説略』（明治二年）のこと— 『図書』11月、1971年 p.56-63.
- 7 遠藤智夫 『改正増補 英和对訳袖珍辞書』明治二年刊と沼津学校刊行本の調査と考察 『英学史研究』vol. 2001, No. 33, p. 169-181, 2000.
- 8 手塚竜麿 東京の初期地方議会と英学者 『日本英学史研究会研究報告』Vol. 1968, No. 97, p. 5-8, 1968.
- 9 婚姻関係にみる沼津兵学校の人物 『沼津市明治史料館通信』Vol. 6, No. 3, p. 2-4, 1990.

